

型絵染版画オーストリアで実った「テンノーワイン」の話

さかもと ふ さ

(型絵染版画家、エディター
イラストレーター)



オーストリアの東部アイゼンシュタットで代々ワイナリーを営むルドルフ・カイザーさんと息子のクルトさん、ルドルフの父、シュテファンさんは、一九三八年に母国のキリスト教団から岐阜県多治見市の多治見修道院に派遣された。多治見修道院でブドウ栽培を任されて、ミサ用のワインを作っていた。

来日後、ブドウ栽培は軌道に乗り、良質のワインが作られた。

太平洋戦争が始まり、ワインの輸入は困難になり、多治見修道院のワインは全国の修道院に送られた。当時宮内省からも大量の注文を受けた。天皇誕生日の祝日に、ドイツ、イタリア等の同盟国の外交官らにも提供された。シュテファン氏は二十五年いた日本を後にして、母国に帰った。日本から持ち帰ったブドウも八十年代迄、栽培をしていた。シュテファンさんの死後、父の思い出として、その年にとれた一番いいワインに、「テンノーワイン」と命名される。一家の姓、カイザーも「皇帝」天皇を意味し、これも何かの縁とルドルフさんはいう。

尺八物語



永岡 慶之助

(作家)

私は最初、相手の話す言葉の意味が、よく飲み込めなかったが、事情が分かれると同時に、「えっ、本当ですか!!」という感じであった。

年に二回ほど、京都前橋の料亭「Y」で催される「銘酒を呑む会」に顔を出したところ、その料亭の女将が二ヶ月ほど前に亡くなられた故、わが会でも追悼を表したいとの話なのだ。その会でも三十回は迎えているから、単純計算でも十五年は続いているわけで、去る女将とは顔馴染である。一次会は和式の料亭で、二次会は洋式の酒場に席を移して歓談、締めくくりは尾瀬ヶ原の

歌「夏の思い出」を合唱して散会というのが恒例となっている。

ところで、一次会の料亭で、あれは幾年前のことであったが、女将が問わず語りに、

「お店が休みの日は、ジーパン姿でバイクに乗り、街道を飛ばすと、日ごろの憂さなど忘れてしまいます。え、かなり遠出も致しますわよ」とわらったので、誰かが

「それは凄いい、ぼくなど自転車ですら怪しいものだ」

と大仰に歎いたものだった。ちなみに、女将は和服の似合う細身のまだ四

十代の女性なのだ。ジーパン姿でバイクに跨り、快音を立て街道を突っ走る姿を想像するだけで痛快であった。その女将が、二年ほど前から座敷に現れなくなった。聞けば入院しているとあって、次に聞いた時には、退院して近所を散歩しているそうだとあり、「それは良かった」と一同言い合ったものである。それがこのたびは、二ヶ月ほど前に亡くなったというのだから、真実、無情迅速の思いを強くうけたことだった。ともあれ、席上に女将の遺影を飾り、黙祷をもって御冥福を祈った次第である。すると、ややあって、白い仕事着

を脱いだ夫君があらわれたと思うと、四角に坐つて礼を述べた上で、「妻を偲びて一曲を」と口上し、手にした尺八を構えた。門外漢の私などに、曲名など知るよしもないが、最愛の妻を喪つた男の哀しみは、その奏される嫋嫋たる尺八の音色はわれらの胞深くにくみ透つた。そういえば、いつも会席で尺八を吹奏してくれたものだが、二年ほど前から尺八を手にして、席上に姿をあらわさなくなつていた、と私は気づいたものである。

それにしても、どうして尺八の音色は、人の心にしみ入り、ゆさぶるのであろうか。西欧の金管楽器と異なる、「竹」という最も東洋的で素朴な楽器の音色はやわらであり、魂の奥まで入り込む感がある。尺八は、竹の長さが一尺八寸に切られるところから、その名が由来するそうだが、文禄、慶長の頃は、尺八より短い「二節切」が流行したという。「二節切」は「二世切」でもあり儂さ感もあつて悪くない。

この「一節切」というのは、竹の一節を切つて作られ、長さは一尺八分であるというから、普通の尺八と比べるとかなり短い。尺八の起源はよく分からぬが、唐の太宗の貞觀年中、居郎呂才なる者が創製したと伝える。

日本に伝来して、短い「一節切」なる独得の短い尺八が誕生したわけだが、これとは反対に、普通の一尺八寸より長大で、「法竹」と称したのを聴いたことがある。と言つてもレコードであるが。

昭和二十二年の初夏、当時、鎌倉市極楽寺九十二番といつた作家中山義秀邸の庭の梅の木に、青い実が見られるようになった季節、私は師とともに、手廻し式のポータブル蓄音器を前にして、神妙に耳を傾けていた。どうして蓄音器など持ち出したかは定かではないが、レコードが尺八の名曲「虚空鈴慕」であり、奏者が海童普門とはラベルによつて鮮明に記憶している。「法竹」と称した海童の尺八は、寸の長丈な独特のものであり、その名声は、当時、

福田蘭童と天下を二分に觀のあつた名手であつた。その嫋嫋たる秘曲の幽玄な音色は、聴く者の心を魅了せずにおかない。音盤の針が停止しても師は黙然としておられたが、ふと遠くをのぞむ面持で、

「あの頃は哀しかったな。乳呑み子の丈和をふところに入れて、暗い夜道を医者許まで薬を貰いに行つたものよ」と眩くように言われたのは、慕い合う二つの魂を写したという秘曲「虚空鈴慕」に触発されての事だつたか。師は名作『厚物咲』や『碑』で世に出るまで、長い苦闘の時代があり、夫人も病いに斃られた。戦後は「テニアン」の末日『土佐兵の勇な話』『華燭』等の話題作を次々に発表。最後は『桃青庵芭蕉』をもつて絶筆とされた。

私は料亭の女将の夫君の尺八から、ゆくりなくも、亡き師と聴いた秘曲のことに思いを馳せた。重ねていう、どうして尺八の音色は、人の魂をもゆさぶるのであろうか。

一線



山本千明

(ECC英会話講師)

大晦日でもない日に、我家ではカウ
ントダウンが始まった。「三・二・一・

〇!!」午前零時の時報と同時に「パー
ン」とクラッカーの破裂音が響き、赤
青黄、色とりどりのテープが勢いよく
空中で交錯する。今夜の主役の次女は、
父母姉が見守る中をハニカミながらテ
ブルについた。彼女の目の前には、ビー
ル、焼酎、ワイン、日本酒、カクテル、
梅酒にウイスキーと様々なアルコール
のボトルが所狭しと並んでいる。今日
はお酒が解禁される日―即ち次女の二
十回目のパースデイだ。長女の時と同
様に、思いつく限りのアルコール飲料

を予算内で買い揃え、正真正銘「初酒」
を飲む瞬間である。

この話をすると、私の友人達には決
まって

「へえー。それまで一滴も飲ませてな
いの？珍しいねえ」と怪訝な顔をされ
てしまう。ここは日本だ。未成年者の
飲酒は法律で禁止されている国の筈。

「飲酒は二十歳になってから」と、ど
の瓶にも缶にも親切丁寧に書いてある
ではないか。なのに「うちの子はいつ
の間にか飲んでたなあ」などと言う。
友人達の「識字率」がこんなに低いと
は知らなかった。

なぜこんなにおめでたい日をあやふ
やにしてしまうのか。もったいない。
だいたい「一線」を画することは日本
人の得意技である。入学、卒業、結婚、
葬式、法事、等、人生の節目々々「儀
式」をもって線を引き、気持ちの上で
もその前と後をピシッと分けてきた。
それは意識的な区切りであり、明確な
スタートラインでもある。その「ライ
ン」なくしてどこから「スタート」す
る気だろう。

外国人でもない友人の子供達が、ど
うして「いつの間にか」お酒をたしな
んだのか、そして「普通」に二十歳ま
で飲酒をしていない私の娘達が何故、
特別扱いされるのか。納得がいかない。
実はこれまでに何度か「ワイン、なめ
てみる？」と娘二人に言った事がある。
娘達はそんな時、決して「イエス」と
は言わず、この「踏み絵」に足を置く
ことは一度もなかった。彼女達にとっ
て、「お酒は二十歳になってから」とい
うルールは、「携帯電話は高校生になっ
てから」と同じで、禁止そのものを憂

えるよりも、「その日を楽しみに待つ」ものであったようだ。

確かに公的には「成人式」という線引きが用意されている。しかしそれは実際の誕生日からは大きくずれており、あくまでも「公」のものである。当日、晴れ着をまとった娘はおびただしい数の着物集団に巻き込まれ、大きな会場に吸い込まれて行った。私は車で待機するのみ。共に感動を味わう場面はなかった。

今から二十年前。気を失いそうな痛みの中で産みおとし、首を支えながら抱いたあのふにゃふにゃな小さな生き物だった次女、乳を飲み、泣き、笑い、言語を発し、自力で立ち上がり、字を書き始めるといふ驚くべき進化を遂げ、思春期という環境的にも厳しい壁を越えて、めでたく「大人」の第一歩を踏み出したのだ。「公」だけに任せるのは、あまりにも悔しい。ここまで育てた私も、少しは感慨に浸らせてほしい。娘達それぞれの二十歳の誕生日は、母親の、母親による、母親のための祝いで

もある。そして恒例のバースデイケーキでは成し得ない。当別な演出をしてくれる必須のアイテムが「初酒」なのだ。

初めて口にする記念すべきお酒は何か？その選択を見守るのも楽しい瞬間だ。若い娘らしく、ワインかカクテルと思いきや、次女の右手は迷うことなく、まっすぐ「純米酒」に伸びた。さすが、「お米の国の娘」：「お嬢さん、通だねえ」と笑いながら小さな杯にお酒を満たすと、慣れない手つきでチビリと飲んで即座に「うっ」と顔をしかめた。初心者には味もアルコール度数も少し手強すぎたようだ。改めてグラスに甘口のワインやチューハイを注ぐと、恐る々々口をつけて「あ、ジュースみたい」と表情が和らいだ。そういえば長女が最初に選んだのは「梅酒」だった。やはりビギナーには甘めのものが受けがいい。翌日彼女はチューハイだけ持って一人暮らしのアパートに帰って行った。

それから二ヶ月後、再び冬休みで帰

省した次女は、長く揺らしていた髪をサッパリとポニーテールにまとめ上げ、お屠蘇を持つ手もなぜか決まっていた。大学の忘年会では、男子学生に「お酒、強いね」と言われたらしい。解禁日から少しづつ色々なお酒を試しつつ、いつの間にか日本酒もイける口になったらしい。「それならとっておきのやつ開けるか？」と夫は嬉しそうに冷蔵庫を覗き込み、その奥に鎮座していた「吟醸酒」を取り出した。四つの杯を順に満たすと、私や娘達の前に置く。次女はスツと杯を上げ口に含み、くくつと飲み干し、芳潤な笑みを浮かべた。

一線を引いてこちら側に来た次女は、この夏、初の選挙投票も無事に済ませた。今は大学の勉強に加えて就職の為の資格講座を受けている。この先、娘達が人生の中で何本の線を引き、どこへ向かって行くのかは分からない。ただ、できるだけ長く、彼女達の傍らで寄り添い、支えたいと願うばかりである。常に「祝杯」のお酒を小わきに抱えて。

命について思う



宮本 富夫

(高松大学 教授)

もう五年になろうか、母を彼岸へ見送ることになった際、母の残した言葉が、それとなく叔母の口から語られた。

義父と義母の世話に明け暮れていた母に、「大変なのに、よくやりますね」と声をかけたら、「子が見ているから」と、返ってきたという。母の三回忌には、「お姉さんは、先生になりましたのよ」と母の妹から、はじめて聞かされた。夢はかなわなかったが、命の営みの場である家庭において、あたり前のことを、ごく普通にたんとこなしながら家族の命の営みと向き合っていた母。彼女の生きざまには、家庭におけるいのちの教育について大切な側面が示唆されていたなあと、今になって思う。

生物にとって次世代を生み育てるこ

とは至上命令に近い。体のどこか奥深いところから湧き上がる強い意志のようなものでつき動かされ、理屈でどうのこうのと取り扱いてできるものとは到底思えない。次世代を育てるために生き、自分の生命を維持していると受けとめていくくらいである。ヒトも一生物種であるから、例外的な存在ではなからうと思うのに、例外と思える事象がヒトの命の営みにおいておこっているように思う。

児童相談所における二〇〇八年度の児童虐待相談件数が四二、六六二件のほまっているという。一九九八年度の六、九三二件から右肩あがりの増加傾向が続いているともいう。虐待につながるような家庭・家族の状況についての調査報告では、経済的な困難、虐待

者の心身の状態、そしてひとり親家庭が上位三位を占めるという。虐待が次世代を育てることとは逆の方向に向かっていると感じとめるなら、かなり深刻な事態であるように思う。

次世代に関わるべきこととして、児童虐待以上に深刻な事例が人工妊娠中絶である。一九四九年から二〇〇六年までの五十八年間の人工妊娠中絶実施件数の総計は、三六、五七七、三四五件のほるといふ。これだけの数の、順調にことが推移すれば生まれるはずの次世代が、ヒトの手によって葬りされたこととなる。人類の祖先誕生から約七五〇万年引き継がれてきた命の流れが、地球における生命体の誕生からだと約三十八億年続いてきた命の流れが途絶えることとなる。彼らが受け継ぎ、次世代へ受け継がれるべき遺伝子が永遠に失われたわけである。かけがえのない遺伝子資源を人類は失ったこととなる。生を受けておれば人類社会にはたしたであろう社会的な貢献のことを考えると、その損失ははかりしれないように思う。

また、二〇〇八年中の自殺者の総数は三二、二四九人(内訳は、男性二二、

八三一人、女性九、四一八人)であるという。過去にさかのぼると、一九九八年以来、ずっと三万人を越えているという。なぜ、こんなに多くの、しかも多くの男性が自死の道を選択してしまっただろうか。次世代を残さずに、あるいは次世代を育てている途中で、自死を決断するのだろうか。

報道によると、痛ましい事件の発生はあとを絶たない。一九九八年から二〇〇八年にかけて、殺人事件の発生件数は、年一、一〇〇〜一、四〇〇件で推移しているという。なぜ命がこんなにも粗末に扱われてしまうのだろうか。

ここで、遺伝学の分野で明らかにされている以下の内容を、前頭葉に言い聞かせ、命の大切さを説くことはできるかもしれないが、心はまだ届くか否か、定かではない。次世代を残そうとする一組のヒト夫婦が次世代にもたらず可能性について、子どもに期待できる遺伝的多様性という点から考えてみたい。有性生殖のもたらす恵みだろうか。配偶子(卵、精子)をつくる際におこなわれる特別な分裂様式である減数分裂は、母方由来の染色体と父方由来の染色体、あわせて二十三対を分配

する際に、約八三万とおりの組み合わせを生ずる。結果として、次世代の出発点となる配偶子に約八三万とおりにおよぶ多様性を生ずる。受精の際、卵の約八三万と精子の約八三万とが対応することになるから、接合体の組み合わせ数は約七〇兆にもおよぶ。

次世代がその生涯において出会うかもしれない環境のいかなる変化にも対応できるようにとの工夫をあらかじめ凝らしているのだろうか、と考えたくなる。一組の夫婦についてすらこのような天文学的な数字が計算される。この約七〇兆におよぶ組み合わせの中から一とか二とか三とか…が次世代の個体として実現し、この世に生を受けることになる。陽の目を見ない組み合わせが圧倒的に多い。このように考えると、生を受けること自体が奇跡的なできごと、すぐく運のいいことであると解釈される。

右のような論理的な説明より、命の日々を訪問診療でささえている、ある女性医師の体験に裏打ちされた言葉の方がはるかに心に響くように思う。『あたり前のこと、ふつうのことがあたり前でなくなつた。誕生、死を体験する

機会をもたなくなつた。家で生まれ、家で最後の時を迎える、家族に見守られて、ということもなくなつた。このことが命を大切にしない事件、命を命と思わない事件が多く発生することにつながっているのではないかと、彼女は語っていた。

日野原重明先生は、先だって、広島女学院における記念講演の中で、「幼児教育の基本としての親子関係」と題し、『育てること』の意味について述べられ、子どもに本来持つている素質をじょうずに引き出すうえで家庭における教育が何よりも重要となる』と指摘されたという。そして『人の命も自分の命も大切だということを伝える「いのちの教育」のために、自分を子どもにかえった状態にして子どもたちの目線でかわること、感謝する心を大切にすること、子どもの育ちの中にある力を見抜くこと』と、話されたという(広島女学院報第一五八号)。家庭という命の営みの場における教育、命についての教育が大切にされる状況を社会全体に還元し、共有することが必要であるように思う。

小説・江戸神仏歳時記 (21)

はとのもり
千駄ヶ谷・鳩森八幡神社



郡 順 史

今回は一つの神社に、二つの御由緒と歴史と御利益をお尋ねする予定になった。

その神社の御名は、渋谷区の千駄ヶ谷にある鳩森八幡神社である。この鳩森神社の呼称は、鳩の森と、鳩と森のあいだにの字を入れておよびするのが正しい、と注意があった。

もう一つは同じ境内にある浅間神社というよりお富士さん（余計わかりにくい、後記します）である。

いずれも江戸時代から存立し、多くの信仰をあつめて来た歴史を持つ神社であるが、鳩森神社さんのほうは、鎌倉時代初期の建立というから今から八百年から九百年の大昔になる。

さて、ご訪問する前に、ちょっととした異変(?)があった。総武線の三鷹行きに乗って千駄ヶ谷駅で降りた。そして改札口を出た途端である、今まであれほど晴れていたのに大粒の雨がぼつりぼつりとふって来たのである。俄か雨だ、濡れるわけにはゆかんと、隣にあったスパーに駆け込み、金五百円也のビニールの雨傘を買った。そして差して信号を渡り、なんと十メートルも歩かないうちに、雨がやんでしまったのである。

どういう事だ。と小首をかしげ乍ら、縁起直しにかたわらの喫茶店に入って、タバコをのみ、コーヒーを飲んだ。

ちよいと厭な予感は続いたが、さいわいに神社の御札所でお目にかかった宮司の平野俊二さんが親切なやさしいわかりやすい口調で説明解説して下さったので、縁起が一度に良いように転がって有効な取材が出来た。

先に鳩森神社の御創建は、鎌倉時代初期と記したが、実はもっと古く古い口述、伝説があったのだ。

それは現在いまを去る千二百年ほどの昔、当時日本有数の高僧・慈覚大師こと円仁僧上が関東巡錫の折、この地に足を止められ、じっと空を見上げておられたことから始まる。

この地は地質がむかないのか、農業的には米が出来ず余り物の役に立たない萱が千駄もとれると言われ、それが地名になったほどであるから人も少なかった。

が、その少ない村人たちが慈覚大師の見ている空を一緒になって見る。

視線の先に青々とした森があり、その森の上を何十羽としれぬ鳩が、飛んでは森へ入り、出ては大空を舞ってまた森に入る、を繰り返しているのである。

「お坊さま、あの鳩どもが何か怪しからぬ事をやるのでございませうか」

我慢しきれなくなつたのか、村の長の喜右衛門おき（假名）が訊いた。

「いや、そうではありません。この森の真中あた

りに小さな祠がありますが、どなたをお祀りしてあるのですか」

「さあ、わかりませんが、それが何か」

「この森にはいちぢるしく神気がただよっております。きっと森の神様が、お祀りされることを望んでおられるのでしょう。皆でお祀りし、村の鎮守の神様になさつたらいかですか」

「ああ、それは有難い。で、どんな神様をお祀りしたらよろしいございませうか」

「八幡様でございませう。この辺はまだまだ戦乱が耐えません。従って村や村人を護るには八幡様をお願いするのが第一番ではないかと存じます」

「有難うございます。早速村人を集めて相談し、八幡様を勧請することに致します」

集まった村人は一斉に頭をさげて慈覚大師に篤く禮を述べた。

しかし実際に村のこの森に八幡様を勧請したのは、それから四百年五百年の歳月を経てからであった。つまり源頼朝が鎌倉に幕府を開くと同時に、八幡宮を開基したのでその刺戟をうけ、「うちでも」という氣が一氣に盛りあがったためのものである。

後祭神は主座に応神天皇、神功皇后。

撰社・末社は八社（現在）。

（誤解のないように念のため記します。応天皇と神功皇后は母子でございませう）

さて由緒もほぼ理解出来たので次は境内を見学させていただき、更にはご利益を教えてくださいだく順になる。

江戸名所図によると、後楽園球場が三つ四つ入るくらいの広大さであるが、これは判り易くするための筆先の遊びで、実際ははるかに小さいのが現状。

しかしこの神社は、境内が広くて特別に大きいというわけではないが、普通の町中に在る神社にくらべると他のお社の建物も数も多いが、そのたがずまいも整然としていて、大げさに言うとそのれぞれに香氣を放っているようにさえ成ぜられる。御社殿は小さくきちんとしたたがずまいであった。

「参拝の栞」によると、弘化二年（一八四五）に建造した社殿は、榿造りで立派なものであったが昭和二十年の戦災によって消滅し、昭和二十三年、昭和五十六年、そして更に平成二年と新築をころろみだが仲々に満足のゆくまでに至っていない。が、しかし戦前、天井に描かれた草花の花々が歴史をふまえて芸術の光を放つようになり、観覧勉強に来る人が多くなったという。

それと他とは極だつて立派、と思ったのは、お神楽殿であった。当社では「能楽殿」と呼稱していらつしや、大祭には能舞が奉納され、また季

によつて薪能も催されると。お神楽好きの筆者としては、まずこの雰囲氣のあるお神楽殿で古式神楽を拝観し、それから薪能を拝見したい、と思つたりした。

そしてもう二つ、あれあれ、と思つた建碑と、へーえ凄いな、と思つたものがあつた。

その一つは「将棋碑」である。この神社の神々に、あるいは神官の中に将棋の名人がおられたのか、それとも神社のうしろに日本将棋連盟があるのでその故かわからないが、お尋ねしなかつたのが残念だがやはり変わった建碑だ、という印象はぬぐえない。

それからへーえ凄いな、と思つたのは「おみこし」の収入庫の数の多さであつた。どこの神社にも普通、二つや三つの収入庫は存在する。だが此処には何と十戸、ずらりと並んでいるのである。普通おみこしは大体一町に一式あるものとされているが、その数からいうと、この神社さんには十町ないしそれ以上に町内からお祭りともしなれば「ワツシヨイ、ワツシヨイ」と掛声勇ましく繰り出され祭りを盛りあげるのであらうか。さぞや壮観、ずいぶん元氣づけられるのではないか。むろんこれも見物したい一つである。

まだこの他にも庚申塚やお富士さんなどがあるが、お富士さんはあとでゆつくり拝見するとして、この探訪記の主意であるご利益を拝聴しなければならぬと、ふたたび平野俊二宮司さんにお目にか

かりお尋ねした。

だが平野宮司さんのお答えは、

「当社社はお利益をおさずけになるためにお祈りしているものではありません。皆さんのお声を集約したものは葉に掲載されておりますからどうぞそれをお読み下さい」

予期したとおりのお答えであった。

これまで二十社寺を越えてお尋ねし、宮司さん住職さんに当社寺のご利益をおたずねしてきた。しかしお答えは、お言葉遣いこそ少々違っていても同一であった。「当社寺はご利益をおさずけになるのが本旨でありません」と。

それはそうでしょうが、我々庶民としては、お護り下さるほうに、ご利益も下さい、とお願するわけである。

ゆえに社寺さんの責任ある方からお伺い出来ないから、近所の人々からお訊きすることにしていく。

さいわい筆者の友人がすぐの近所に住んでいるので、探訪が終わってから突然訪問して聴いてみた。

すると彼のたまわく。

「ずいぶん色々なご利益話しは聴くが、やはり実成するのは、家内安全、健康、災難除けではないかな。家族が怪我をしないとか、病気になることもなく治して下さいとか。一般人は何と言っても家族第一だからね。何かあると治して下さい、襲つ

て来ないようにして下さい、と、すぐお願いに行きわけだ」

「その効果はあったの」

「あつたと聴いているよ。もっとも本当のところは神様が治して下さいのか、医者が治してくれたのかわからないが。しかしお願する対象が有る、という事が、一般の人にとっては大切なのではないかな」

何だが哲学的な話になってしまったが、かたわらにいた同町内の住人の友人が膝を乗りだして、

「鳩森八幡さまは武の神さまだからね。武に関する災厄に絶対にお護り下さるよ」

声に力をこめて告げてくれた。

「どういう事ですか？」

と反問すると更に声に張りをもたせて、

「三年前だがうちの町内のおばあさんが刃物を持ったひったくりに会ったんだ。そしておばあさんが腰を抜かす前に、ひったくりの方が何かにつまづいて、自分の刃物で指先を小さく傷つけて、驚いて逃げ、おばあさんは怪我もせず盗られもせず済んだんだ。それと昨年の七月、友人の家へやはり刃物を持った強盗が押入った時も、偶然だろうがパトカーが二台も家の前を通りかかりそのサイレン音を聴いた強盗はびっくり仰天して、何も盗らずに慌てて逃げて行ったそうさ。それから一年だったか——」

黙ってきいてみると、まだまだいくらでも喋りそうなので、彼の「ご利益話」は中止してもらった。が、これからも伺えるように、「ご利益」とは自分の心に「信」があるやなしやの問題だ、といつものような結論になってしまったが――。

三

さて、いよいよ「お富士さん」のお参りならびにお勉強である。

ここの「お富士さん」も御神体は本物の富士さんと同様、浅間神社さんである。

ともあれ関東人、殊に江戸っ子は富士山が大好きだ。大好きというより神さまと思っているようだ。

その一つの証として、江戸時代のもっとも古い時代から、朝起き晴れ渡った中の富士山を見て、両掌を合わせ拍手を打って拝むのを習慣にしている、元氣な一日の始まりとしていたのだ。

従って誰もが一生のうち一度は「お富士さんに登ってみたい」を願望にしていた。それが凝って自分の住む処にやたら富士の名前をかぶせた。たとえば富士見町、富士見が丘、富士見が池などなどである。

そして徳川時代になり天下泰平が続き、ちよつと工夫すれば誰でも富士参りが出来るようになった。そこで考え出されたのが「富士講」である。

町内の富士信者が集って、少しのお金を出し合せて、代表者をえらび、老人や女性の代わりに富士山にお詣りして貰い、お札やお守りを頂戴し、有り難がるわけである。

これ以上は永年江戸の「富士信仰」を調査研究しておられる竹ノ内洋一郎先生の著書を引用させていただく。先生は大学で建築学を教えていらしたが、停年を迎えられて偶然な事から「江戸の富士信仰」に興味を持たれ、のめり込んだそうである。

先生によると、現在の東京には四十から六十の富士塚が存るそうである。盛時はその倍以上あったそうであるが、信仰の消滅や火災、管理の面倒さなどで講自体がつぶれ、無くなっていたのだという。

だが鳩森八幡社の「お富士さん」は巖然として昔の面影を残しながら存在する。

まずはお参りさせていたごう。

八メートルほどの樹々に囲まれた小山になっていて、頂上へ登る登山道が少しだけ下からも見える。

ここでは「お富士さん」と言わず、浅間神社と名っている。

山の入口には鳥居があり、その右手に石碑がある。その石碑に、「東京都指定。有形民族文化財」と記されている。

最初に建てられたのは寛政元年（一七八九・光

格天皇御宇・十一代徳川家斉」とある。その後は何度か建てかえられたが、その結果が今日の美しさになったのであろう。

登らせていただく。足許は当然の如く平坦な歩道を歩くという具合にはゆかない。しかも途中に幾つかお宮さんが有るので、信心深い(?)小生は一つづつ足を留めて両掌を合わせて拝む。ただしお賽銭は差し上げなかったが。

やがて山頂に至り、と言つてものの十五分とはかからなかったと思うが、浅間神社の奥様さまがあり、これを遙拝して登山はおわつた。

しかし勉強は終わったわけではない。クロボク(黒朴)なるものに触れてよく観て実感しなければ、お富士さんに登り参拝したことにならない、と聞いていたからである。

クロボクというのは、早い話が富士山の溶岩の事である。富士山は宝永四年(一七〇七・東山天皇御宇・徳川五代綱吉將軍)の十一月二十日大噴火を起し、江戸中まで灰だらけにしたそうだが、そのため富士山の途中に小山が出来(宝永山)、溶岩があまた流れ出た。その溶岩をクロボクと呼んだのだ。

つまり言ってみればクロボクはお富士さんの体の一部なのである。しかし軽いものではない。江戸まで背負って運んでくるのは重くて容易ではなかったろう。遅まきながら「ご苦労さま」と言いたい。

ここにはクロボクが多く使われているが、当時の講の役にあつた人は大変なご苦労であつたと思うが、一体講とはどんな組織でどのように運営されていたのだろうか。

要は頼母子講と同様に、何人何十人かの人があつまつて、少しづつ金を出し、その金をくじに当たった人が使い、返却していく、という組織である。

富士講は、金を出すのは変わらないが、それを富士参りの代参をする費用、おみやげ費に使うのである。

だが世の中、いつの時代も悪い奴がいて、この金を着服して逃亡したり、代参に行かずに途中で消費したりするバチ当りがいて、よく採め事になり果ては刃傷沙汰を起してお上のお世話になることもあつたという。

しかしそれでも富士講は、なんとか続き、戦前まではある所では車や電車を使わず、昔ながらの歩きで「六根清浄」と唱えながら一歩一歩お山を登る人が大勢いたという話である。いい話だ。

今回は「富士山講」をメにしたが、読者の方々に機会があつたら、お山のある神社にお詣りしたら、ぜひお富士さんにもお目にかかつて下さい。

鳩森八幡神社の御住所は

〒一五一—〇〇五一 東京都渋谷区千駄ヶ谷一ノ一ノ二四 電話(〇三—三四〇一—一二八四)

宮司 平野 俊二

—おわり—

(表紙説明)

■保多織

縦糸と横糸を一本ずつ交差させる平織りに対して、保多織は三回平織りで打ち込んで四本目を浮かせ織る。丈夫で独特の風合いを持つ。

株式会社岩部保多織本舗

所在地／香川県高松市磨屋町

電話〇八七―八四―一五三一

九時三十分から夕方六時まで。日曜・祝祭日休み

「酒林」随筆特集 第八十号

平成二十二年十一月一日号

発行人 西野 信也

印刷人 株式会社 太陽社

発行所 西野金陵株式会社

高松市亀井町二番地八

万一乱丁・落丁がありましたら、ご一報下さい。